

●シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦

## 泥まみれの軌跡

## 泥まみれの軌跡

大阪府 藤本善造

### 一、プロローグ

昭和二十(一九四五)年十二月の下旬、私の所属した約一五〇〇人の部隊はシベリア中央部に位置するグズバス炭田の一角に設けられた捕虜収容所の門前に到着した。粗末な軍衣を透して零下四〇度の厳寒が肌に食い込んできた。

十月初旬、奉天(瀋陽)を出るとき関東軍の高官は「ソ連軍の命令で諸君に北滿へ行ってもらう、その目的は戦場の跡片づけ、もう一つは収穫期の遅れている農産物の穫り入れに協力することだ。それが終わり次第奉天へ戻り、日本へ帰ることとなる」と命令した。

しかし北滿へ入ってもそれらしい指示は何一つなく、ハルビンを過ぎ、黒河に着き、凍結した黒竜江を渡ってブラゴエシチェンスク駅から再び汽車の旅が始まった。私達の周りにいたソ連兵は、口を開けば日本へ帰るのだ、と言いつづけていた。私達も蜘蛛の糸にも似た一筋の希望にすがり続けてきた。だが、凍結して白々と光るバイカル湖を過ぎた頃から、捕虜という忌まわしい身に墮とされて、いず

こかへ連行されつつあることを絶望のうちに受けとめ始めていた。

收容所は周りを高さ五メートルぐらいの板塀で囲み、その上には幾重にも有刺鉄線が張られ、所々に裸電球が取り付けてあった。四隅には望楼が設けてあり、中に哨兵がおるらしく、その影が時々揺れていた。ただ不思議に思ったことは、板塀の向こうに私達が入居するはずの建物らしいものが何一つ見えないことであつた。

やがてソ連の将校が二人がかりで入口の板の扉を左右にギギツと開けた。そこをくぐって内部を見てびっくり仰天した。ほの暗い内部に見えているのは、かまぼこ状の半地下式の土小屋が並んでいるのだ。それは冬の野菜貯蔵庫か、豚小屋のような居住棟であつた。

狭い入口を二、三段下りると中にペーチカが燃えていて、むせ返るような土の臭いが立ち込めていた。ちよつと触れただけで空気の中から水が滴り落ちそうな一〇〇%の湿気だつた。真ん中を一・五メートル位の通路が通り、その左右に上下二段に仕切られた板の間の寝台があつた。その上に一枚の毛布を敷いて座つたが、その姿は街の片隅で物を請う乞食の姿でもあつた。この日から三年間、思いもよらない虜囚としての苦難な日々を送ることとなつた。ちなみにロシア語ではこの土小屋を「ゼムリヤンカ」と呼ぶ。

## 二、收容所の明け暮れ

激動の昭和二十年は慌ただしく暮れ、酷寒が募る一方の中で昭和二十一年が明けた。ソ連にも年の区切りとしての新年はあるようだが、正月という風習は無縁のことなのか、それらしい処遇は何一つない、素っ気ない元旦であった。

食事は、朝は飯盒の蓋一杯程度の燕麦の粥、昼は三〇〇グラムの黒パン一切れ、夕食は朝と同様だが、これに具がほとんど入っていないスープが付く。そして時々、思い出したように五グラム程度の砂糖と鮭の切身一つが支給された。

粥にもスープにも若干のバターが入っていたが、カロリー計算をしたら一日一〇〇〇カロリー程度であったと思う。このため、以後帰国するまで腹の皮が背中に張りついたままであった。

作業に出たのは一月の六日前後だったと思うが、シベリアでは一月が最も酷寒期であった。天地ともにしんしんと凍り、外へ出ると凍った空気が鼻の中へ突き刺さってくるように思われた。降雪は少なく太陽を仰ぐ日が多かったが、その太陽も天空に凍りついて、日溜まりにいても少しのぬくもりもない月と同様の天体であった。また夜明けから日没までダイヤモンドダストが常に中空にきらめいていたが、それを美しい風景として受け止める心の余裕は皆無であった。

さらに、故郷で、北の空斜めの方角に眺めた北極星が、常に頭上で輝いていることが不気味であった。それは、懐かしい祖国日本がもはや手の届かない異国となったのではないだろうか、との恐怖感を抱かせる夜景であった。

ところで、スターリン支配下のソ連にも人の心というものがあつたのか、二十二年早々からレンガ造りの宿舍の建設が始まり、秋頃には新居へ移ることとなつた。乞食小屋の暮らしとはおさらばしたが、食事の方は一向に改善の兆しはなく、飢えは日々に深まり、一五〇〇人の日本兵は年を追つてやせ細つていった。

### 三、労役作業について

#### ア 鉄道引込線の作業

シベリアでは様々な労役作業に従事させられたが、それぞれの作業に何年何月頃からということになると記憶に曖昧な点があるので、今も記憶に残っているあれこれをアトランダムに綴つていきたい。

シベリアで最初に課せられた作業はタイバー炭坑への鉄道引込線の工事であつた。幸いなことは、いきなり土方仕事ではなく、予定地の除雪作業が始まりであつた。一月の七日頃からと思うが、まだ明けきらない七時頃に収容所を出た。ついでだが、午後の四時を過ぎるともう夕景となつてきた。冬は日足の短いことは肌で知つているが、この異様な明け暮れが私達に心理的な圧迫感を与えていた。

シベリアの雪はサラサラしていて大変軽い。だから作業は大した力を要しないのだが、ものの五、六分もそれをしていると爪先や指先が辛抱の限界を超えて、ただただ痛いのである。仕事どころか、スコップを投げ捨てて足踏みと手をこするのが最も大事な仕事となる。寒さに耐えかねて、中には白

樺の小枝を折って焚き火を始める者がいた。火が燃え上がるとたちまち監督が飛んで来て「何を怠けているのか、早く仕事をさせろ」と隊長に噛みつかんばかりに言う。その場では全員がパツと散るが、いなくなるとまたぞろ焚き火が人垣の中心となる。こんなイタチごつこのうちに初日の作業が終わった。

除雪が終わると、道床造成のため連日土方仕事で、土掘りと土運びに追われる日々となる。除雪の終わった二月頃の大地は地下三メートル位まで凍結していて、つるはしを振り下ろすと「カチーン」という金属音を発して跳ね返ってくる。これには驚いた。大地が土ではなく、岩石そのものであった。だから一日かかって掘り起こす土はバケツ一杯程度という日が間々あった。

そんな日に比べて春先の仕事ははかどる。つるはしで大地を打つと一条の割れ目が走る。そこへ鉄のくさびを打ち込むと一トンを超えそうな土くれが転がり出す。飢餓感を忘れてそんな仕事に取り組んだ日もあった。

ところで余談になるが、私はシベリアで初めて白樺を見た。また私達がいた地域では、白樺以外の樹木は一本も見ることがなかった。冬の間はそんな風景に心を走らせる余裕はないが、若葉の頃、昼の休憩時、この下で横たわっていると、その上を流れる一片の白雲は、束の間の虜囚の身を忘れる風景であった。反面、冬になると実に悲しい非情な景色を現出した。それは亡き人々の眠る白樺林の墓地である。白樺の枝々が天に向かって林立し、その上を白々と照らす月の光は、黄泉の国もかくやと

思われる景色であった。そして、より悲しかったことは、その墓が年ごとに白樺を切り倒して広がっていったことである。

### イ 初めて知った地底の世界

酷寒のシベリアにもようやく青い風が渡り、それに乗ってソ連の労働者らのメーデーを祝う歌声が流れてくる頃、いよいよ炭坑の坑内作業に入ることになった。

五月の初め、三〇人くらいのグループに分かれて、一番方、二番方、三番方の順でセンベイ炭坑の坑内作業に入った。

坑内へ入る前に、今まで書き洩らしたことについてちよつと触れておきたい。それは作業に出るとき必ず付いて来る警戒兵のことだ。その兵隊はすべてが年の頃十七、八歳の少年兵であった。それが私達の前後に付いて作業場へ向かうのである。もちろん、銃剣付きの小銃を小脇に抱えながらである。少年兵だがそれなりの権威があるのか、地方人らは一様に敬して遠ざかる風が見えた。これが付かなくなつたのは二十二年の半ば頃からであった。我が方のリーダーの引率で外へ出るようになったとき、私は青天白日という言葉を胸の中で反芻したものであった。

センベイ炭坑というおかしな名称の炭坑は、収容所から歩いて三十分ほどのゆるやかな丘陵の下にあった。ここに既述した三つの鉱山の中では最も開発が進んでいた。ただ地上部の設備は、小さな事務所、エレベーターのやぐら、これから延びようとする高さ三十メートル位のぼた山、という姿であ

った。結論的に言えば、私達が帰国する頃にはほぼ完成に近づき、時折、石炭の産出も見えていた。日本の炭坑は斜坑を炭車で降りるといふ姿と思うが、シベリアではエレベーターで一直線に地底へ降りる。着いた所は地上から百二十メートルだそうだ。エレベーターを出た所は天井までの高さが三メートル位に見えた。そして、全部がコンクリートで巻かれているので、地の底にいるという圧迫感はなかった。しかし奥へ進み枝坑へ入ると、天井も低く岩肌が荒々しくむき出しになっていた。そこを通る度、命が縮まるような恐怖感を抱いた。

この日、私が指示された仕事は、同僚と二人でのトロッコの線路掃除だった。軽作業はありがたかったが、どうした具合か眠くなるのに閉口した。収容所へ帰ってその話をすると、物識りが「それはガスのせいだ」と言う。坑内には、ごく薄いガスが流れているそうである。そのためか、女性労働者がランプを持って坑内を歩き回っていた。あれはガス検知のためとか。あの鉦山では今でもあんな原始的な手段をとっているのだろうか。

線路掃除は初日だけで、次の日から坑内でのトロッコ押しで明け暮れることになった。建設途上の坑内だけにトロッコは、人力で掘削現場とエレベーターの間を往復する。その要員は日本兵が二人、ソ連の労働者二人の構成であった。

この仕事は格別な技術を要するものではないし、平坦な線路を押すときはさしたる力を要しないが、悪路にかかると大変な力が要る。何分にも掘りたての坑道だけに線路がゆがんでいる所がしばしばあ



る。時には線路が埋没している所がある。さらに時々脱輪する。脱輪すると大変だ。何分にも積載量一トンのトロッコだ。上げるまでにはひと汗もふた汗もかく羽目となる。散々手こずって復輪すると、もうエネルギーのすべてを消耗して、その場でへたり込むことはしばしばであった。

ところで、ロシア語が少し分かるようになって私達が驚いたのは、相棒のソ連の労働者の大半が囚人に近い人々であったことだ。強制労働でシベリアへ追放されたのである。その理由は、ドイツとの死闘の間やむなく不都合な所為のあった人々が、戦後、彼らに言わせると「スターリンがシベリアへ行けと言った」とのことであった。不都合な所為とはドイツ軍に占領された地域の人々だ。こんな場合、心ならずもドイツ軍の命に服しなかつたら自分の命が危ない。ソ連という国家の峻厳過酷な一面を見る思いであった。

坑道の中でもう一つ強烈な驚きを覚えたことを綴っておきたい。

当時のソ連で、神様、故国の英雄と仰がれていたのはスターリン大元帥であったと思う。国家が行使できる権力のすべては彼の手中にあったはずだ。にもかかわらず、ほの暗い坑内では「スターリンは悪者だ、馬鹿だ」と言う痛烈な声を幾度も聞いた。この言葉を聞いたとき、私達の方が、辺りに誰かいないか、と心配りをしたものであった。

今、ロシアは民主化の推進によってスターリンは歴史の上から消えようとしている。これは往時のソ連の体制からは信じがたいことだが、この遠因は今を去る五十余年の昔、シベリアアグズバス炭田の

地下百二十メートルにあいた蟻の一穴から始まっていたのだ。

センベイ炭坑へは七月の末頃まで通っていたが、この間、二番方、三番方の勤務を繰り返した。どの勤務でも私の仕事はトロッコ押しが大半であった。一日一〇〇〇カロリーちよつとの食事、痩せこけた体で、病気にもかかわらず、よくもあんな仕事が出来たことと思う。

ウ 真夏に雪空を仰ぐ

腹いっぱい食わせてやれないので長い炭坑作業は無理だ、との判断があったのかなかつたのか定かでないが、八月頃から地上の作業に戻ることになった。その作業場は、私の三年間にわたる捕虜生活で一度も行ったことのないクラスノイ炭坑への引込線工事であった。作業は、土を運んで道床を作り、それをつき固めてバラストを敷き、その上に枕木を並べてレールを敷設するという工程であった。

この作業でしんどい思いをしたのは、線路の曲がり直しのためボールを使う作業である。例えば、この仕事を十人でやるとする。そのとき十人の呼吸が合わない、二人か三人のところへレールの重さのすべてが一瞬かかる。私のような貧弱の体格ではそんな場合に出くわすと腰の骨が折れそうな思いであった。だが、若い時はそれでも力があるのか、歯を食いしばってそんな瞬間に耐えた日もあった。

この作業中の八月の末、信じがたい季節の移り変わりを目にした。その日は朝から肌寒い日であった。私達は駅へ着くと、構内から石炭を拾って来て焚き火をしながら作業をしていた。ところが午後

の三時頃、曇天の空からハラハラと雪が降り出してきた。私達は貨車の下に身を寄せ合つて、「日本では今の時期なら海水浴に行けるのに……」と言いながら鉛色の空を見上げていた。

間もなく二度目の冬が襲いかかってくる。身悶えするほど恋しい日本への帰国は絶望のようだ。ぼそぼそとした話し声もいつしか途切れて、沈うつな空気が周りを包んでいった。

#### エ 煤と埃まみれの工場

昭和二十二年の正月過ぎからレンガ工場への通勤が始まった。この工場は八時から十六時まで、十六時から二十四時までという今まで経験したことのない二交代制の作業場で、途中二十分の休憩を除いて八時間フルに機械に追われる作業場であった。工場の概要は、レンガの製造と乾燥を主体とする建物が一棟、その横に原料の粘土採取場が広がり、建物の後部に回り方式の焼き窯が一基という姿であった。製造は、まず原料の粘土がレンガ成型機の上部へトロッコで運び上げられる。ここで水を注いで練り、その練土が機械の下部の口から延々と出てくる。それをレンガの原形状に切断する。切断した生レンガを板の上へ十枚ずつ載せてゆく。その板を担いで乾燥室へ入れる。乾いたものは次々と窯へ詰める。このような各工程を経て製品ができて上がるのである。当世こんな作業はすべてオートメーション化されていると思うが、当時はすべてが人力に頼る方式であった。

この一連の作業の中で一番つらいのは原料の粘土採取場である。粘っこい土を掘り起こすのは大変力が要る。また、粘土をトロッコに積む仕事もつらい仕事であった。一時間も二時間も連続作業はで

きない。骨休めのため腰を下ろす。すると監督が青筋立てて怒鳴りに来る。こんな次第で、この作業場は二、三日毎に交代しながら働いたものであった。

では工場内の仕事はどうかといえ、何分にも機械に追われているので勝手に休むことはできない。作業時間中はフルに歩き回ることになる。こんな次第で、終業の合図があると皆が工場の土間へ足を投げ出してへたり込んでいた。また、乾燥室の構造は、石炭を焚いて、その熱気、煙、ゴミ、ホコリのすべてがこの中へ吹き込まれるのである。つまり、乾燥室は煙突そのものでもある。だから室内には煤がうず高く溜まっているのである。このため、終業を迎えると全員が黒人のような顔や手足となる。だが、空きっ腹を抱えて疲れ果てた我々にとってそんなことはどうでもよかった。途中の二十分の休憩時には、この中へ入り込んで汚れも構わず座り込んでいた。その姿は、暖かい陽だまりを探しうずくまっている野良猫の姿であった。

もう一つ、この工場で忘れることができない思い出がある。それは囚人が着るような水色の作業衣を着て我々の尻を追い回していた監督の姿である。前記した二十分の休憩が終わると、この男が機械の上でレールを切ったような鉄片を鐘がわりに叩く。そして、我々をジロリとひとにらみして「ヤポンスキーサルダート、ダワイ、ラボータ（日本兵、さあ早く仕事にかかれ）」と叫ぶのである。この一言を聞く度、私達は捕虜という立場の悲しさ、哀れさを身に沁みて知るのであった。

昭和二十二年の初夏の頃、アパート建設の作業場で労役に服することとなった。そしてこの当時、全員が下痢で苦しんでいたように思う。その原因は、前年の秋、ソ連の穀倉とも言うべきウクライナ地方が凶作とのことで、我々の主食は燕麥でなく豆の粉の煮た物を食わされていたのである。

作業中でも、便意を催して待てしばしのできないとき、皆が基礎穴の片隅で用便をしていたのである。

工事の始まりは基礎の穴掘りからだが、この頃になるとスコップはさくさくと土中へ刺さる。しかし、下痢で体力の落ち込んだ我々は、仕事が長続きしない。またしても座り込む、ということが多かった。通りかかった監督が「何を怠けているんだ、早く仕事をしろ」と文句を言う。すると私達は口を揃えて、片言のロシア語で「フシヨサルダート、バリノイー」と言い返すのである。全部の兵隊が病人だ、と訴えるのである。分かったかどうか、監督は人を小馬鹿にしたようなジェスチャーをして立ち去って行った。

さて、ある日、皆から離れたところで私が土掘りをしていると、通りかかった一人の女性労働者が足を止めて「お前は何歳か」と聞いた。今が男盛りと思っていた私は、やせた胸をそり返らせて「二十三歳だ」と答えた。するとその女は「うそだ、お前は少年だ」と言い返してきた。子供だと言われれば私はムツと腹が立った。だが、その女は体重七〇キログラムを超えそうな大女だ。「そんな人から見たら少年だと言われるのはやむを得ないか」そう思っただけで私は返事をしなかった。しばらく私を見つ

めていた彼女は返事がないと知ったか、やや鼻白むような顔をして立ち去って行った。シベリアで見  
る二十歳前後の女性は大麥スリムなのに、三十歳半ばの女性達の突然変異的な巨体はただただ驚くば  
かりであった。

### カ 再びセンベイ炭坑へ

三度の厳冬期を生き抜いてシベリアの荒野にも春の風が渡るようになってきた。この年の六月、こ  
の苦界から足を洗う、という至福の日が来るとは夢にも思えない私は、再度センベイ炭坑の作業隊に  
加わることとなった。この頃は、既述した三つの鉱山がそれぞれ完成に近づきつつあることを耳にし  
た。私達一五〇〇人の日本兵の血と涙で完成したのだとは言わないが、国際社会の、いや人間の信義  
に背を向けて我々をおぞましい境遇に陥れたソ連にとっては上々の首尾ではなかったか。

ソビエト社会主義連邦共和国に向かつては言いたいことは山ほどある。だが、その相手は今はいな  
い。今となつてはすべてが空しい。もう過去は忘れよう。私も人並みに思うことがある。だが、失わ  
れた青春の三年の歲月の事どもが喉に刺さったトゲとなって私の心を逆撫でするのである。

さて、センベイ炭坑はこの当時建設が九〇%方終わり、残る工事は石炭積込み設備と、私が帰国の  
日まで従事した給水塔の建設であった。

給水塔は高さ十メートル、径が三メートル位だったように思う。基礎の穴掘りが終わるとセメント  
打ちが始まり、その進捗に併せてレンガ積みが始まる。

私の仕事は、一輪車でレンガやセメントを運ぶ仕事であった。狭い板敷きの通路を果てしなく往復を繰り返すのである。次第に手がしびれてくる、足がだるくなってくる。勝手休みをすると、レンガ職人が「ダワイ、ダワイ」と口やかましくせき立てる。毎日が空腹であり、体は地の底へ引きずり込まれるようにだるい。それも知らずに給水塔は日を追って青い夏空へ伸びていった。

### 終章・鎮魂の祈り

昭和二十二年の何月頃だったか忘れたが、私は健康診断で三級兵と判定されて、收容所の炊事場業主として雑役に従事した。このとき、所属の異なる中隊から石井君という人も入って来た。新入者はこの二人であったと思う。私達はほとんどペアとなって仕事をしていたが、石井君が口ぐせのように言っていた「早く家へ帰りたい」という言葉が今も耳の底に残っている。

炊事場の勤務は三カ月位だったと思うが、二人は揃って炊事場を出た。以後、中隊が異なるので石井君の顔を見たことがなかった。

ところが、ある日の夕刻「石井君が炭坑で事故死した、遺体は医務室に置かれてある」との情報を知り、私は医務室に駆けつけた。石井君の遺体は毛布に包まれて廊下に横たえてあった。「触ってはいけない」と言われたが、私は毛布の上から足のあたりをなでさすった。「石井君、あんなに家へ帰りたいと言いつづけていたのに」、心の中でささやきかけたとき、溢れる涙と号泣を押さえかねた。

私が直接目にしたのはこのときだけだったが、収容所では多くの人々の事故死や病死を耳にした。満腔の恨みを胸に、異土に果てた多くの方々の無念は察するに余りがある。

今はただ御霊やすらかれと祈りつつ、泥まみれの虜囚記にピリオドを打ちたい。

#### 【執筆者の紹介】

藤本善造氏は大阪府連創立以来の会員である。本年五月の集いに抑留記をお願いしたところ、復員直後から書きためた記録があるとのこと、快諾を得た。しかるに後日になり引越しの際にそれが紛失して見当たらず、どうしようかと彼も随分悩まれたと思う。

七月半ば過ぎて、約束を守り記憶を辿り筆を執っていたら、これを届けられた。貴重な体験記である。

(大阪府 杉山 森一郎)